

第1 - (小) 分科会

分科会テーマ	通常学級における特別支援教育		
話題提供者	松下 和枝	司会者	長谷川 端美
助言者	鈴木 由美子	記録者	鈴木 通大

1 話題提供者より

個々の特性により様々な困難を抱え、授業に取り組めない子供がいる現状がある。多様性を尊重し、主体的に学ぶ個別最適な授業づくりをめざし、そのための手立てを特別支援教育の視点をもって講じることが大切だと考えた。個別最適な学びの視点をもって、「学習の個性化」と「指導の個別化」について研究仮説を設定し、実践を行った。

算数科や体育科等、様々な教科での実践を行った成果として、「学習の個性化」での自己選択・自己決定の場を設けることは、子供が主体的に取り組む手立てとなった。また、「指導の個別化」は、困り感を抱えている児童だけでなく、すべての子供に対する支援となった。今後、一斉授業と個別最適な学びのある授業を発達段階に応じてどのように組み合わせるかを検討し、子供の実態や特性に合った個別最適な授業づくりを学年で連携して進めたい。

2 協議内容

黒石小の発表を受けて、「学習の個性化」と「指導の個別化」を視点に、実践の感想や日頃の支援方法をグループで話し合い、その後共有をした。以下の意見が出された。

- ・黒石小の実践にあった「学習の個性化」と「指導の個別化」を行うことが、通常の学級の支援を必要としている子供にとって有効となっていた。今回は学年での実践であったが、学校全体として取り組んでいければよいと感じた。
- ・子供に選択肢を与えることは大切ではあるが、どこを選択させるかを考えなければ目標に近づけないため、何を選択させて、何を目標にしていくかを考える必要がある。

3 助言者より

- ・研究テーマを受けて、「ライフキャリア」と「共生社会」がキーワードとして挙げられる。障害者権利条約にも、「私たちのことを私たち抜きで決めないで」と定められている。
- ・UDLは障害の有無に関わらず大切である。支援を必要とする子供が、自分は出来ないからと負い目を感じながら助けてもらうのではなく、色々な物の中から選べるようにすることで、誰もが支援を受けられるようにしたい。授業のUD化モデルを参考にすることで、支援方法のヒントにもなる。
- ・ライフキャリアの視点から自己決定（意思決定）の力を育てる必要がある。日常的に自己決定の場を設定しなければ、いざという時にも出来ない。幼少期から少しずつ、日常的な場面で練習していくことで、進路・就労につながる自己決定の力を育てていきたい。

第2－(中)分科会

分科会テーマ	通常学級における特別支援教育		
話題提供者	高畑 加奈（静岡市立服織中学校）	司会者	青山 晃大（静岡市立長田西中学校）
助言者	伏見 倫也（静岡市立宮竹小学校前校長）	記録者	小林 仁美（静岡市立松野小学校）

1 話題提供者より

発表テーマ「ほっとるうむ実践報告」

(1) 校内フリースクール「ほっとるうむ」の設置・運用

学区にフリースクールがないことや静岡市・静岡県・全国と比較して服織中学校の不登校生徒の割合が高いことから、令和4年度に運用方法や規約等を検討し、令和5年度から担当を配置し運用している。

校内で作成した運営規定には、開級の目的・対象とする生徒・担当および職員体制・学習（活動）内容・手続き・留意点が記載されている。令和5年度に担任を設置し、教科担任を配置、入級面談の実施、個別の支援計画の作成を行い、運用を始めた。出欠確認の方法や過ごし方、リモート授業について等、具体的な運用ルールも決めて取り組んだ。

(2) 令和5年度の成果と課題

① 成果

ア 中学1～3年生の合計43人が利用した。

イ 友だちがいる、授業に出なくても良い、好きなことができるなどの理由で「ほっとるうむ」なら来てもいいと思えるようになった。

ウ 進路に応じて居場所を変える生徒も出てきた。

② 課題

ア 「ほっとるうむ」の担任を置いたことで、在籍学級の担任との関わりが薄くなった。

イ 職員間で「ほっとるうむ」に対する意識が統一されていない。

(3) 令和6年度に向けての取り組み

① 職員に「ほっとるうむ」ワークショップを開き、職員の意識統一を図る。

② 校内フリースクールという名称をやめ、担任を配置せず、担当に変更する。

③ 「ほっとるうむにいきます」カード（1日版・1時間版）の作成をし、学級を設置する。

④ 「ほっとるうむ」入級生徒がSSTや道徳に取り組む時間を週に1時間設定する。

⑤ 「ほっとるうむ」にも入ることが難しい生徒のために、「ほっとるうむ2」を設置する。

⑥ 時間割を教科でなく、「学びの時間」（午前中）と「フリータイム」（午後）に分ける。

(4) 令和6年度の成果と課題

① 成果

- ア 「ほっとるうむ」利用者のうち6名の生徒が、在籍学級に戻ることができた。
- イ 相談場所としての認識が高まり、3名の生徒が相談目的として利用した。

② 課題

- ア 別室に対する規定・方針の情報が少ない。
- イ 教育課程の組み方や評価・評定のつけ方。
- ウ 他校との情報交換の場がない。
- エ 小学校との連携が困難。
- オ 校内の相談相手が少ない。

2 協議内容（10分間のグループ協議の後、全体で意見の共有を行った。）

（1）良い面

- ・適応指導教室とフリースクールの良さを取り入れている。
- ・担任が常駐していることで、生徒に安心感があるので、とても良い。
- ・服織中学校の実践は温かみがあり、出席黒板のアイデアが素晴らしい。

（2）検討したい面

- ・小学校から早めの就学支援や入学前の支援移行会議が大切である。
- ・人的物的環境を整え、「自学」の時間を減らし、「学び直し」の授業を行えるようにし、在籍学級に戻ることがを目的にしなくてもいいのではないか
- ・関わる職員や支援員等の共通理解や同じ方向で対応することが難しい。

（3）各学校の実践例

- ・校内で支援員や教員がついていて自習できる場所があるが、子どもたちのニーズにあっていないからか、利用者が少ない。
- ・「ステップルーム」という名称で設置しているが担任が配属されていない。規定を厳しくしたことで、「ステップルーム」に入ることができなくなった生徒が出てきてしまった。
- ・朝、担任と生徒が連絡事項や学習内容を確認しているが、遅れて登校する生徒がいた場合、担任が登校したことを把握できないことが多い。

3 助言者より

「ほっとるうむ」は、通常学級で支援を要する生徒たちにとって主体的に取り組む場となり、個の教育的ニーズに応じた指導の体制が図られ、将来必要な力をはぐくむ場となっていた。

「ほっとるうむ」は、私たち現在の社会の縮図である。多様性のある子どもたちに対して、誰一人取り残さない教育を地道かつ真摯に進める場でもある。「ほっとるうむ」を居心地の良い場所にすることがまず大切である。同時に子どもたちが所属学級に戻りたいときに、今度は、全校のどのクラスも居心地が良いクラスであってほしい。学校全体を、「楽しいところ」と子どもたちに感じさせ、自分を見つめそれぞれに挑戦できる場にしてきたい。「ほっとるうむ」は、「可能性の宝庫」と言える。